

保育者養成のための読譜力向上に関する一考察

A Study of the Improved Reading Score for Becoming Nursery Teachers.

小澤俊太郎[※]井上茜^{※※}小川弥輪^{※※※}高野恵美^{※※※※}野本裕美子^{※※※※※}松井ひかる^{※※※※※}

要旨 保育に携わる人にとって「弾き歌い」は重要なスキルであり、そのために不可欠なものが「読譜力」である。本論では、学生たちの読譜力を向上させることを目的とした音符の速読、写譜という2つの方法による訓練の結果を考察した。

全8回の速読テストでは、初回と最終回に同一課題による比較を行い、正解率の向上が著しく認められたが、へ音記号に関しては音域によって改善が見られず、今後への課題を残した。

写譜においては楽譜を実際を書く作業によって、「音価及びリズムへの理解」、「正確に記譜する能力」の必要性を改めて認識した。

事後の意識調査では、約7割の学生が「以前より楽譜を読めるようになった」と答えており、訓練によって読譜力向上に一定の効果があらわれたと思われる。

【キーワード：読譜力 音符の速読 写譜 加線 音域】

I. はじめに

童謡は、子供たちが人生最初期に触れる音楽であり、その童謡をメインとした「弾き歌い」は、保育に携わる人にとって要ともいえるスキルである。基本的なピアノ演奏の技術、歌唱力もさることながら、現場では必ずしも十分な準備期間が設けられるとは限らず、季節ごとに変わるさまざまな歌、臨時に派生する曲にもスピード感を持って対応する力が求められており、それを物語るように就職試験に「初見演奏」を課している幼稚園、保育園も少なくない。

そのために必要不可欠なものが着実に楽譜を読む力、すなわち「読譜力」である。

埼玉純真短期大学の「音楽」の授業では、技術的なレベルによって簡易楽譜を用意するなどの個別対応はするものの、授業内容、試験の課題については音楽歴や楽器経験の有無を問わず、差異のないものとなっている。経験者にとっては容易なことでも、多くの未経験者にとって、読譜は時間を要する荷の重い大変な作業であり、それゆえに、

音符ひとつひとつにカナを振る、あるいは音を覚えなければ弾くことができない（聴いて覚えるという方法に頼らざるを得ない）という事態も生じ、読譜作業が疎かにされがちな点について、我々は、以前より問題視してきた。

こうした現状を改善すべく、今般、本学において初めて読譜力に関する訓練、および調査を行う運びとなった。1年間音楽の授業を経験し、一定の曲数をこなしてきた2年次の学生を対象に、音符の速読テストを複数回実施し、成績の推移を数値化して読譜の過程で躓きがちな問題傾向を認識するとともに、別角度からのアプローチとして楽譜を写して書き取る「写譜」作業を並行して行わせ、訓練を通しての学生たちの意識の変化、また浮き彫りとなった課題について探った。本論はその方法、調査とそれによって得られた結果をまとめ、今後の読譜力向上に関わる指導への、より効果的な方法を得る手がかりとするものである。

※	小澤俊太郎	こども学科助教
※※	井上 茜	こども学科非常勤講師
※※※	小川 弥輪	こども学科非常勤講師
※※※※	高野 恵美	こども学科非常勤講師
※※※※※	野本裕美子	こども学科非常勤講師
※※※※※	松井ひかる	こども学科非常勤講師

II.現状把握の事前調査

調査に先駆けて、学生個々の現状を把握するため、「音楽Ⅲ」履修者を対象にアンケートを行った。本学において2年生の前期授業にあたる「音楽Ⅲ」は、90分授業を45分ずつに分けて、声楽専門の講師1名が担当する「合同」授業と、5名のピアノ

専門の講師による「個人レッスン」の時間を合わせて、ひとつの科目としている。アンケートは、このうち「個人レッスン」の時間に、一人ひとり用紙を渡して記述させたものであり、質問内容と回答は以下のとおりである。

アンケート内容

音楽Ⅲ履修者 アンケート 2017.7.13
回答数 108名（全ピアノ個人レッスン担当者分）

[ピアノを練習する際、難しい、わからない、不安に感じる事は次のうちどれですか？]

- | | |
|--------------------------|-----------|
| ・ト音記号の音を読むこと | 11名 (10%) |
| ・ヘ音記号の音を読むこと | 72名 (67%) |
| ・リズムを考えること | 69名 (62%) |
| ・拍子について | 41名 (38%) |
| ・片手の練習 | 5名 (5%) |
| ・両手の練習 | 38名 (35%) |
| ・譜面に書いてある音と鍵盤の場所が一致していない | 18名 (17%) |
| ・弾き歌いの曲の進度 | 35名 (32%) |
| ・不安に感じることはない | 4名 (4%) |

(その他の自由記述による意見)

- ・テンポを速くしたときの焦り。
- ・指番号がないと弾けない曲が多い。
- ・「さんはい」のタイミング。
- ・高校の音楽科で教わった内容以上のことを知りたい。
- ・コード
- ・課題に間に合うようにするために、事前に早めに曲が欲しい。
- ・指使い。

[歌を歌う際、難しい、わからない、不安に感じることは次のうちどれですか？]

- | | |
|------------------|-----------|
| ・正確な音程で歌うこと | 51名 (47%) |
| ・声の音量 | 48名 (44%) |
| ・ピアノと一緒に弾き歌いすること | 73名 (68%) |
| ・不安に感じることはない | 5名 (5%) |

(その他の自由記述による意見)

- ・声の高さ。高い音で歌うこと。
- ・人前に出ると緊張する。
- ・周りを見ながら弾くこと。
- ・高い声が出ない。

「留意事項」

- ・回答項目は、複数選択可とした。
- ・括弧内のパーセンテージは、選択の割合を表す。(小数点第1位四捨五入)

回答結果から分かるように、音符を読むといっても、ト音記号（高音部記号）に苦手意識があると答えた学生が11名であるのに対し、ヘ音記号（低音部記号）の場合72名と、およそ7倍の開きがあり、ヘ音記号への苦手意識の割合は、全ての項目の中でも一番高い。

次いで多かったのが、リズムを考えること（69名）となっており、読譜の躓きのポイントとして頭に入れておく必要がある。また、片手の練習（5名）、両手の練習（35名）、ピアノと一緒に弾き歌いする事（73名）と、作業が増えるごとに苦手意識も高まることが顕著に見て取れる。

読譜では、音符とリズムの二点が如何に正確に、且つ時間を置かずに把握できるかということが、重要な鍵になると思われるが、ヘ音記号読みの苦手意識の高さに注目した時、まずは音符を瞬時に読む習慣を付けることが大事ではないかと考えた。拍子やリズムを省いた、音読みに特化した訓練は、読譜の習慣付けの第一歩となり、これまで読譜作業から目を背けてきた学生にとっても、正面から向き合う契機となるのではないだろうか。

以上のことを踏まえて、独自に速読課題を作成し、実践する運びとなった。

Ⅲ. 課題の実施

Ⅲ-1. 方法

第1回から第8回まで速読課題を各回ト音記号30秒、ヘ音記号30秒の時間をとり、測定。並行して第4回から第8回に、計5回行った写譜課題については特に時間制限せず、前半2回は課題の書き写し、後半3回はリズム譜に各自で音を当てて、メロディーを完成させる「応用編」とした。（図2参照）

・調査対象

平成29年度の本学における2年生

・調査時期

平成29年7月～8月

・調査内容

- 1) アンケートによる学生の意識調査（初回と最終回に計2回実施）
- 2) 速読課題（第1回から第8回まで全8回実施）

（図1）

	問題数	ト音記号		ヘ音記号	
		加線	非加線	加線	非加線
第1回	11問	4問	7問	4問	7問

第2回	11問	4問	7問	4問	7問
第3回	11問	4問	7問	4問	7問
第4回	11問	4問	7問	4問	7問
第5回	12問	5問	7問	5問	7問
第6回	12問	5問	7問	5問	7問
第7回	12問	5問	7問	5問	7問
第8回	11問	4問	7問	4問	7問

※比較のため、第1回と第8回は同一の課題

3) 写譜課題（第4回から第8回まで計5回実施）

（図2）写譜課題譜例 第1回～第5回

No.1 第1回

コールユーブンゲンより
ト音記号 2小節の単旋律

No.2 第2回

（ ）姓 学籍番号（ ）氏名（ ） 平成29年7月31日(月)実施

コールユーブンゲンより
ヘ音記号 2小節の単旋律

No.3 第3回

（ ）姓 学籍番号（ ）氏名（ ） 平成29年8月3日(木)実施

「こどものうた」より“ぞうさん”
右手旋律の最初の4小節（ト音記号）

第4回

No.4

ド ド ミ ラ ラ レ レ ♯ソ ソ ♯ソ ソ ♯ソ ラ ラ ♯ソ シ ド

()組 学籍番号()氏名() 平成29年9月28日(月)

「こどものうた」より“おもちゃのチャチャチャ”
左手旋律の最初の4小節（へ音記号）

第5回

No.3

ソ ♯レ ド ♯レ ド ♯レ ソ ♯ソ ♯ソ ♯ソ ♯ソ

()組 学籍番号()氏名() 平成29年9月3日(木) 実施

「こどものうた」より“とんぼのめがね”
右手旋律全メロディー（ト音記号）

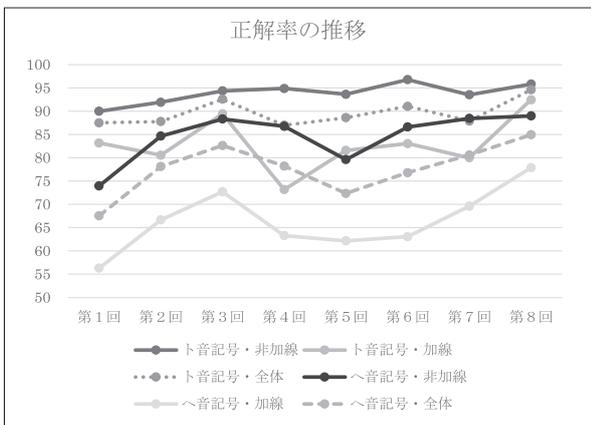
Ⅲ-2. 「速読課題」の結果と考察

図3は速読課題（全8回）の正解率を、項目ごとにとまとめたものである。グラフにしたものを図4に示す。

(図3) 「第1回～第8回正解率一覧(%)」

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回
ト音記号・非加線	89.99	91.93	94.36	94.89	93.64	96.78	93.54	95.83
加線	83.18	80.56	89.45	73.17	81.58	83.06	80.00	92.48
全体	87.51	87.79	92.58	86.99	88.61	91.07	87.90	94.61
へ音記号・非加線	73.97	84.66	88.34	86.76	79.63	86.62	88.46	89.00
加線	56.31	66.67	72.71	63.30	62.18	63.06	69.62	77.88
全体	67.54	78.11	82.65	78.23	72.36	76.80	80.61	84.96

(図4) 「第1回～第8回正解率の推移」



どの項目も、ト音記号よりへ音記号の正解率が低い。また、加線と非加線の正解率を比べてみると、ト音・へ音記号関係なく加線の成績が悪いことがわかる。

ト音記号の第5回以降とへ音記号の第4回以降は、緩やかではあるが正解率は増加している。これは、回を重ねることで速読に慣れてきたこと、そして、第4回から速読課題と並行して行われた写譜課題や、ピアノ専門講師による「個人レッスン」内での個別プリント（図5）を使用した指導の効果があらわれたのではないかと推測される。

(図5) 個別指導用プリント No.1

埼玉純真短期大学・音楽III
音楽個別プリントNo.1
平成 年 月 日

クラス () 氏名 ()
学籍番号 ()

①下記の5線に、「まん中のド～高いド」までの音階を書きなさい。(上行形レシミ…)
書いた音の下の余白に音名(レシミ…)も書きなさい。



②下記の5線に、「低いド～まん中のド」までの音階を書きなさい。(上行形レシミ…)
書いた音の下の余白に音名(レシミ…)も書きなさい。



③下記の5線に、「高いド～まん中のド」までの音階を書きなさい。(下行形シラ…)
書いた音の下の余白に音名(シラ…)も書きなさい。



④下記の5線に、「低いド～低いド」までの音階を書きなさい。(下行形シラ…)
書いた音の下の余白に音名(シラ…)も書きなさい。



同一課題で行った第1回と第8回の正解率は、訓練の結果どう変化したのであろうか。いくつかの比較図をもとに、詳しく見ていく。
まず、正解率を図6に示す。

(図6) 第1回と第8回の正解率の比較図

	第1回	第2回
ト音記号・非加線	89.99	91.93
加線	83.18	80.56
全体	87.51	87.79
へ音記号・非加線	73.97	84.66
加線	56.31	66.67
全体	67.54	78.11

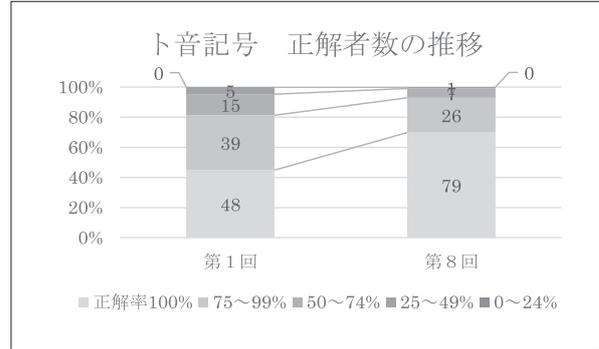
すべての項目で正解率が増加している。特に、へ音記号の増加が著しい。

次に、ト音記号の正解率ごとの正解者数を図7に、グラフにしたものを図8に示す。

(図7) ト音記号 第1回と第8回の正解者数の比較図

	第1回	第8回
正解率 100%	48	79
75～99%	39	26
50～74%	15	7
25～49%	5	1
0～24%	0	0

(図8) ト音記号 第1回と第8回の正解者数の推移

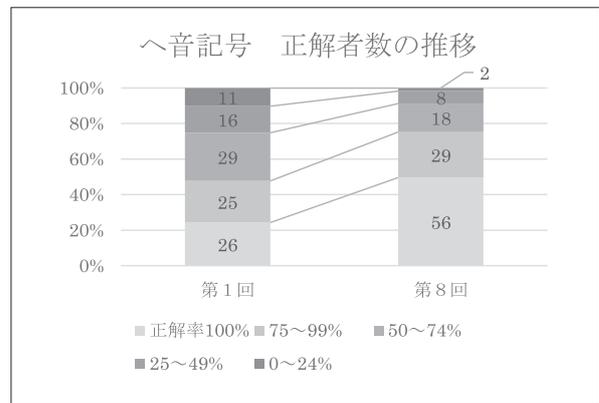


正解率 100%の学生が 1.6 倍に増加し、正解率 74%以下の学生はおよそ半数になった。
へ音記号も同様に見ていく。(図9・図10)

(図9) へ音記号 第1回と第8回正解者数の比較図

	第1回	第8回
正解率 100%	26	56
75～99%	25	29
50～74%	29	18
25～49%	16	8
0～24%	11	2

(図10) へ音記号 第1回と第8回の正解者数の推移



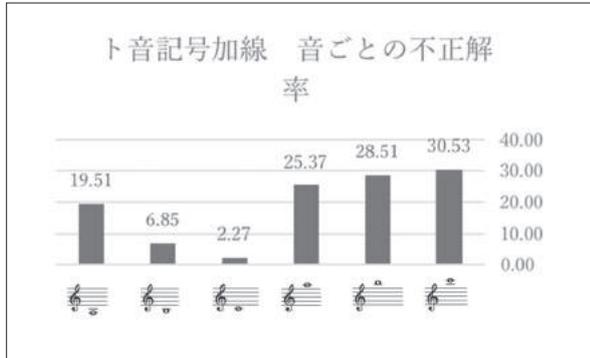
正解率 100%の学生は 2.15 倍に増加し、74%以下の正解者は半数になった。

全8回という短期間ではあったが、ト音・へ音記号どちらも正解率と正解者数にはっきりと成果があらわれた。

回数を重ねることで増加した正解率だが、加線についてはト音・へ音記号どちらも増減の変化が大きく安定していない。その要因は何なのか探るべく、加線の音ごとの不正解率を比較し正解率との関連について検討した。

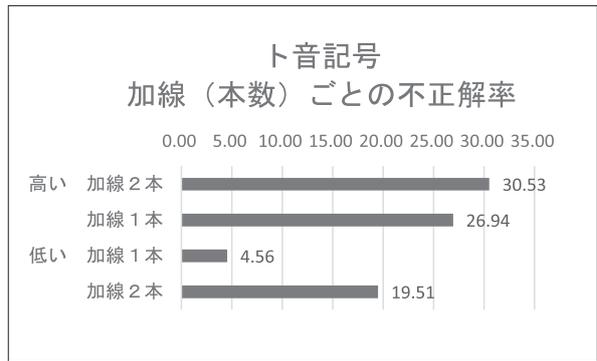
まず、ト音記号・加線における音ごとの不正解率をグラフにしたものを図11に示す。

(図11) ト音記号 加線における各音の不正解率グラフ



一点ハよりも高い音域の加線音の不正解率が高いことがわかる。
さらに、図11を加線の本数ごとにまとめると次のようになる。(図12)

(図12) ト音記号 加線ごとの不正解率



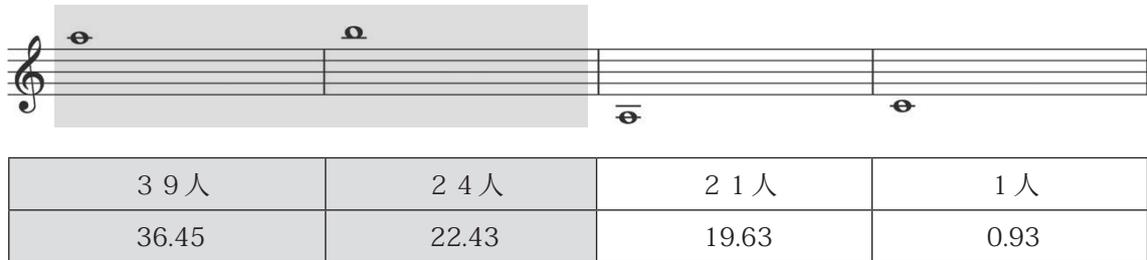
このように、加線の本数が増えるほど不正解率も高い。

2つの比較図から、加線の音域と本数が不正解率に関わっていることがわかった。この2点に注目しながら特に正解率が低かった課題を詳しくみていく。

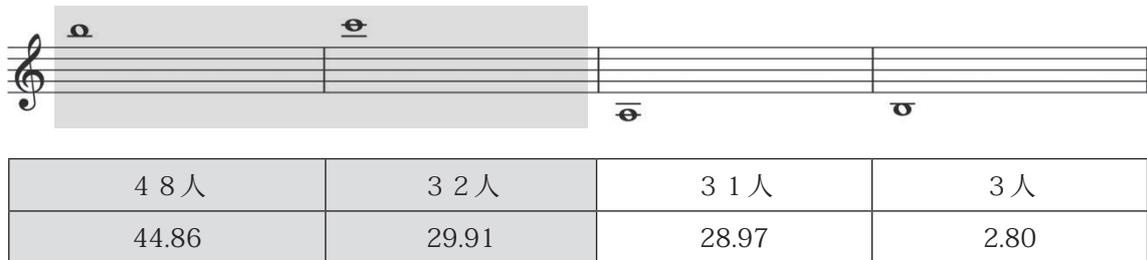
まず、第2回と第4回の音ごとの不正解率を数値の高い順に図13に示す。

(図13) 第2回と第4回の音ごとの不正解率

第2回



第4回

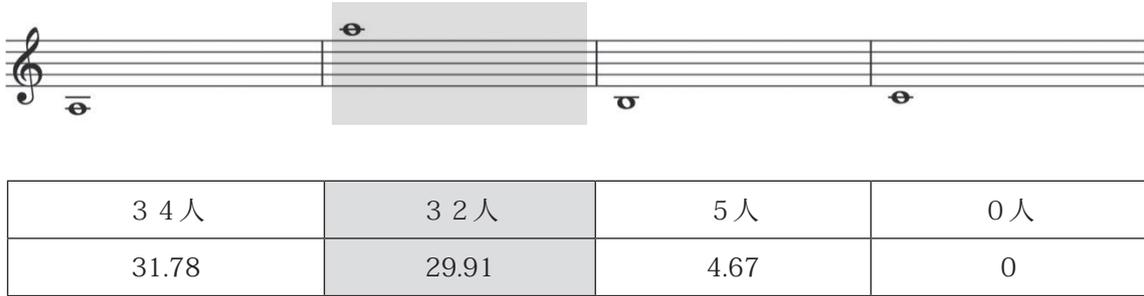


一点ハよりも高い音域の加線音と、加線2本の不正解率が高いことがわかる。

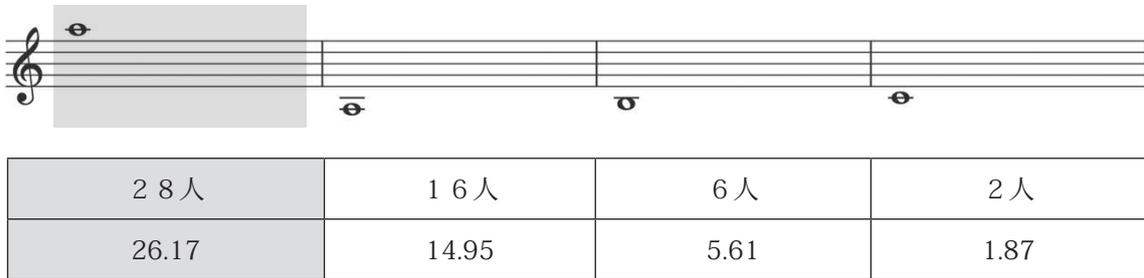
正解率の高かった第1回、第3回と正解率の低かった第2回、第4回を比較すると次のようになる。(図14)

(図14) 正解率の高い回(第1・3)と低い回(第2・4)の比較図

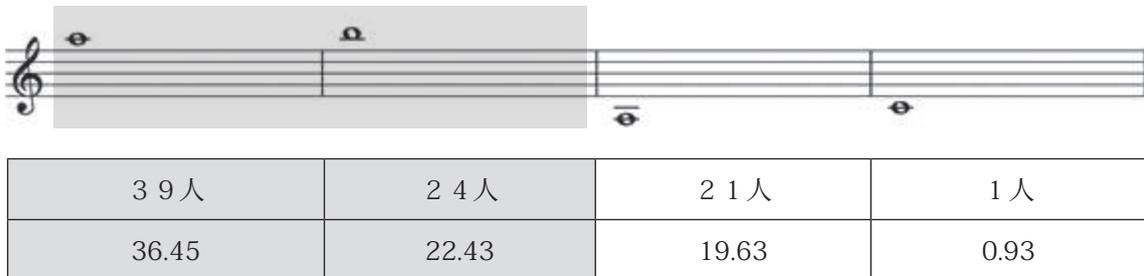
第1回



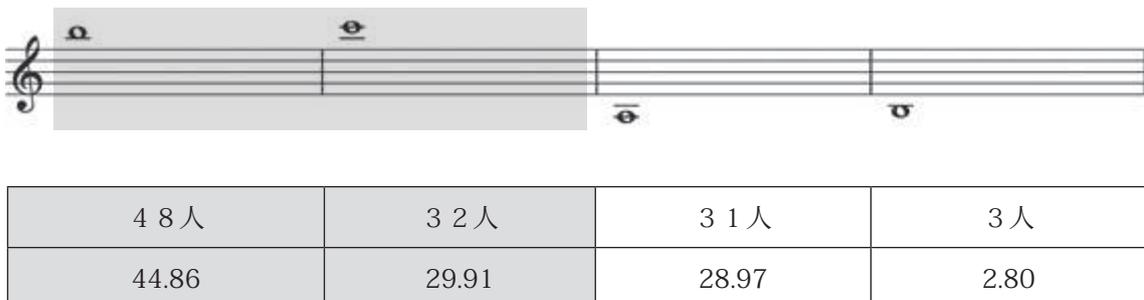
第3回



第2回



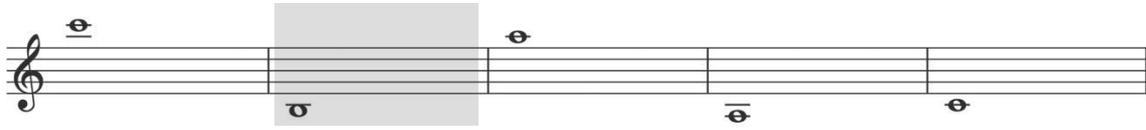
第4回



比較すると、一点ハより高い音域の加線音と加線2本の問題が多いことが、正解率減少の要因に
なると推測される。

第5回の場合はどうであろうか。(図15)

(図15) ト音記号 第5回 加線の音ごとの不正解率
第5回



37人	21人	19人	13人	2人
34.58	19.63	17.76	12.15	1.87

口の不正解率が高いが、不正解の内8割が空欄だった。これは第5回で加線音がそれまでの4問から5問に増えたこと、さらに問題の最後に出題されたことで時間が足りなかったためと推測され

る。

第6回、第7回、第8回も同様に、加線の音域と本数が不正解率に関連していることがわかる。(図16)

(図16) ト音記号 第6・7・8回 加線の音ごとの不正解率
第6回



29人	22人	21人	18人	1人
27.10	20.56	19.63	16.82	0.93

第7回



37人	28人	15人	11人	8人
34.58	26.17	14.02	10.28	7.48

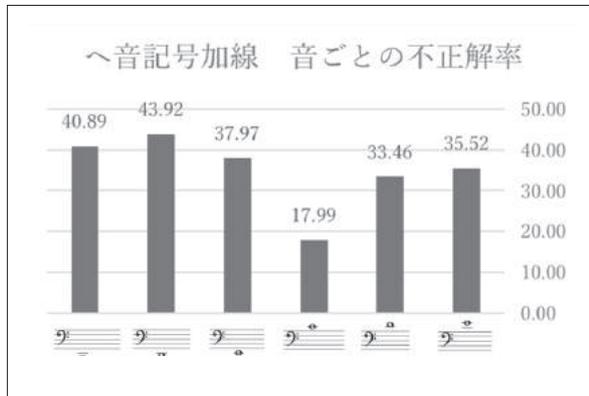
第8回



17人	16人	1人	0人
15.89	14.95	0.93	0

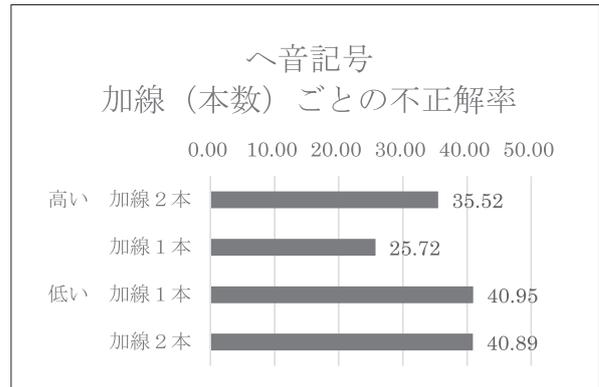
同様に、へ音記号を見ていく。へ音記号・加線における音ごとの不正解率をグラフにしたものを図18に示す。

(図18) へ音記号 音ごとの不正解率



一点ハよりも低い音域の加線音の不正解率が高いことがわかる。しかし、ト音記号の加線ほどはつきりとした差は見られない。図18を加線の本数ごとにまとめると次のようになる。(図19)

(図19) へ音記号 加線ごとの不正解率



高い音域では加線の本数が増えるほど不正解率も高い。しかし、低い音域ではほとんど変わらない。2つの比較図から、加線の音域と本数どちらも不正解率の要因だと言いつけることはできなかった。

ただ、多少ではあるが音域による不正解率の差はあるため、詳しく検討した。

まず、第5回以降の音ごとの不正解率を次の図20に示す。

(図20) 第5回以降の不正解率

第5回

60人	37人	36人	33人	25人	
56.07	34.58	33.64	30.84	23.36	

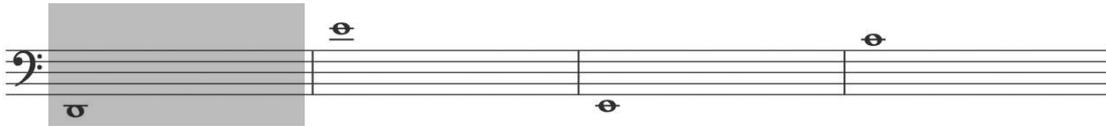
第6回

62人	59人	41人	34人	10人
57.94	55.14	38.32	31.78	9.35

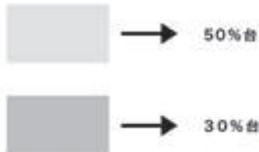
第7回

55人	40人	34人	20人	7人
51.40	37.38	31.78	18.69	6.54

第8回



38人	28人	24人	10人
35.51	26.17	22.43	9.35



各音の不正解率が30%以上と、50%以上のものを、□で表した。

50%台（薄いグレー）の不正解率は全部で、4つある。その中で一点ハより高い音域の音は1つ。また、30%台（濃いグレー）を見ると、全部で8個あり、その中で一点ハより高い音域の音は2つ。

まとめると、不正解率が30%以上は全部で、12個あり、その中の一点ハよりも高い音域の数は3つということになる。

これらの結果は、一点ハより高い音域の正解率が加線の正解率が増加してきた第5回以降上昇していくことの現れである。さらに、一点ハよりも低い音域には明確な改善が見られないということでもある。

つまり、音域によって正解率の差が出ているということである。

今回速読課題の考察を行うことで、次のことがわかった。

- ・ト音記号…一点ハより高い音域の加線と、加線の本数が多いほど不正解率が高い。
- ・ヘ音記号…一点ハより低い音域の加線の不正解率が高い。加線の本数については今後より多くのデータをとり検討することが必要。

Ⅲ-3. 写譜課題の結果と考察

第1回と第2回の課題においては、写譜の経験がほとんどない学生たちへの準備練習として、まずは楽譜を書くことに慣れる、いわば、写譜に対

する心構えを示すための課題であるともいえる。結果として、書かれている楽譜を見たまま書き写すのみということから、ピアノ演奏の得意、不得意に関らず、ほとんどの学生が間違えることなく正確に書くことができた。

以下に、その実例をいくつか挙げる。

(図21) No. 1 No. 2の良く書けた譜例



第1回と第2回の課題を、特に問題なくクリアすることができたため、第3回以降は、やや難易度を上げた応用編とした。

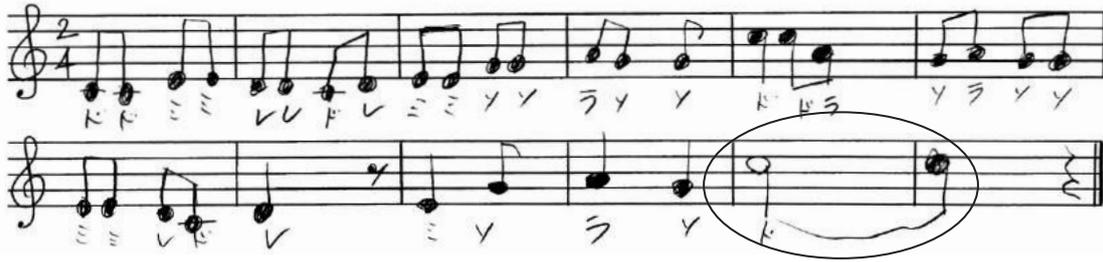
1段目に用意されたリズム譜の下に音名がふられており、指定された音名を使って、五線上に音符と休符を書き、旋律を完成させるという課題である。これは、速読課題によって音符を読むことに少しずつではあるが慣れてきた学生に対し、音符を五線上の正しい位置にどの程度書くことができるかを検証してみたいということからでもある。

(図22) No. 3.4.5の良く書けた譜例



指定された音の位置を正確に捉えている学生が

(図29) タイの付け方が違う



(図26)～(図29)に示したように、符尾(棒)の長さや向き、鉤(はた)の向き、あるいは臨時記号(#やb)やタイの付け方の間違いも多く見られた。普段楽譜を読むことに比べ、楽譜を書くことに慣れていないという歴然とした事実がもたらした結果であろう。これは課題を仕上げる過程で、音名の五線上での位置に意識の大部分が注がれてしまうため、こうしたリズムや音符への配慮が薄れてしまうことが原因の一つではないだろうか。

今回の写譜課題の結果を考察することにより、次のことがわかった。

- ・楽譜を見たまま書き写すことに関しては苦手な学生は少ない。
- ・音符の書き方、リズムを考えさせる問題に関しては、その捉え方に正確性を欠き、楽譜を完成させることが困難な学生が多い。

IV. 結論

IV-1. 速読課題における結論

全ての結果及びデータから、学生の意識の変化を探る。

これまでⅢ章において述べてきたそれぞれの課題の結果と考察を、全課題の実施後に行った最終アンケートの結果と照らし合わせることでそれを証明できないだろうか。

まずは学生の読譜に対する意識の変化を探る。

図30 最終アンケートより項目1の結果

①速読課題を行なって、ピアノを練習する時、音を読むことを意識するようになりましたか？

	回答数	選択の割合
楽譜を見たら、すぐ音を読めるようになった。	17名	15%
ピアノを練習する時、音符を見て、何の音か考えるようになった。	48名	43%
以前と比べて、早く音符を読めるようになった。	74名	67%
以前と変わらない。	15名	14%

図30から分かるように、約7割の学生が、以前と比べて速く音符が読めるようになったと回答している。この結果は我々にとって非常に嬉しい結果となった。

今回の課題の実施が少なからず学生にとってプラス的作用をもたらし、我々の望む「読譜力の向上」の一翼を担ったと捉えて良いであろう。

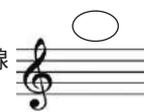
では次に、速読課題の実施によって導き出された、結果と考察はどうであろう。

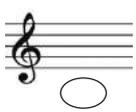
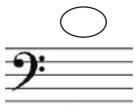
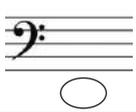
Ⅲ-2において述べたように、ト音記号とヘ音記号の不正解率には加線によって特徴的な傾向があった。

ト音記号は高い音域が苦手、ヘ音記号は低い音域が苦手であるというものだが、これを最終アンケートの項目2の結果と照らし合わせて見ていく。

図31 最終アンケートより項目2の結果

②速読課題を行なって、加線のどの場所を読むことが苦手でしたか？

	回答数	選択の割合
ト音記号の上の加線 	47名	42%

ト音記号の下の加線 	23名	21%
ヘ音記号の上の加線 	78名	70%
ヘ音記号の下の加線 	92名	83%
苦手だと思ったことはない	2名	2%

ト音記号は加線の上と下とでは、2倍の差があった。そして苦手意識はヘ音記号に比べると低い傾向がある。

この結果から、「一点ハより高い音域の加線の不正解率が高い」とこと、学生の意識は一致していると言える。

ここでト音記号におけるアンケート結果から、興味深い発見があった。それは最初に実施したアンケートと、今回の最終アンケートの結果による比較だ。

図32 最初のアンケートの結果より

①ピアノを練習する際、難しい、わからない、不安に感じることは次のうちどれですか？

	回答数	選択の割合
・ト音記号の音を読むこと	11名	10%

2つのアンケートを比較すると、最初のアンケートでは不安だと感じている学生は少ない。(図32)しかし、課題を進めた結果、加線への苦手意識を新たに認識する学生の割合が増えた。

「分かるようになった」ことが大きな収穫であるのは言うまでもないが、「分かっていないことに気づく」ことも、また意義のある成果と言えるのではないだろうか。

ヘ音記号でも加線の下のほうが苦手と答えた割合が多かった。やはりこれも我々の導きだした「一点ハより低い音域の加線の不正解率が高い」という結論を裏付けている。

しかし加線の上下にかかわらず、苦手な学生が7割以上いることは今後の課題の作成、別のアプローチからの指導など今後の展望につながる結果となった。

IV-2. 写譜課題における結論

写譜課題では単に書き写すという行為にはあまり多くの誤りがなかったもののリズムを問うている問題では間違いが目立っていく傾向が見られた。

最終アンケートでは図32のような形で学生への調査を行っている。

図33 最終アンケートより項目3の結果

②写譜に関して学んだことはありますか。あてはまる下記の項目I-IVに○をつけて下さい。複数可。

音符の書き方	59名	(59%)
楽譜の書き方	50名	(45%)
リズムのこと	38名	(34%)
音符のこと	36名	(32%)

全5回の写譜課題を終え最終的に行ったアンケートの結果、「音符や楽譜の書き方」と「リズムと音符のこと」の間に明らかな差が生まれた。

おそらく多くの学生が写譜という課題に対して、単に楽譜を書くという認識を持っているのであろう。しかし、実際には楽譜を書くためには音符やリズムの種類への意識が必要であり音符の五線上での位置関係が非常に重要な要素なのである。

では、初回アンケートの結果と照らし合わせてみるとどうなるであろうか。

「不安なこと」という質問に対して「リズムを考える」と回答した学生は69名(62%)いた。明らかにリズムへの苦手意識が見て取れる結果であった。

しかし、最終アンケートで「学んだこと」としてリズムと回答した学生は38名(34%)にとどまった。

これは我々が写譜課題の考察で至った、「リズムへの意識にかける」という内容と一致する結果である。やはり学生にとって写譜課題は楽譜を書き写す作業であり、リズム・拍子記号等への意識は薄いと考えられる。

この辺りは今後の調査への課題でもあり、我々は、学生に対してリズムなどをより意識させる指導の必要性を感じた。

今回の調査・考察により学生が抱えている問題とその現状を知ることができた。

「音楽」には絶対値というものがあまりなく、縛りの少ない自由なものである。例えば演奏試験でその結果を点数で明記することは難しく、またあまり意味を持たない。

しかしそれゆえに学生が何で困っているのか、何が苦手なのかを即座に数値化できないという側面も持っていた。

今回行った速読や写譜はそれを改善するための第一歩であり、今後さらなる研究へと繋げていく次第である。

謝辞

アンケートに真摯に向き合い、協力してくれた学生たちに対して、講師一同、感謝申し上げます。

*参考文献

井戸和秀編. こどものうた100: いろいろな伴奏で弾ける選曲. チャイルド本社, 1982, (保育実用書シリーズ).

ヴェルナー, フランツ. 全訳コールユーブンゲン. 信時潔訳. 大阪開成館, 1998.